

1. 件名：福島第一原子力発電所における多核種除去設備等処理済水の二次処理性能確認試験の分析等についての面談
2. 日時：令和3年5月19日（水）13時00分～15時30分
3. 場所：原子力規制庁 18階会議室
4. 出席者
原子力規制庁
長官官房 金子審議官
原子力規制部 東京電力福島第一原子力発電所事故対策室
竹内室長、岩永企画調査官、澁谷企画調査官、知見主任安全審査官

林田管理官補佐、大辻室長補佐、新井安全審査官、久川係員、
吉田技術参与、近藤技術参与、平山技術参与、鈴木技術参与、林技術参与
（テレビ会議システムによる出席）

東京電力ホールディングス株式会社 福島第一廃炉推進カンパニー
プロジェクトマネジメント室 松本室長他担当3名
福島第一原子力発電所 担当5名（テレビ会議システムによる出席）

5. 要旨

- 東京電力ホールディングス株式会社から、多核種除去設備（以下「ALPS」という。）等処理済水の二次処理性能確認試験の分析等について、資料に基づき以下の説明があった。
 - 昨年実施した二次処理性能確認試験における核種測定方法について
 - ALPS 除去対象核種の定量評価方法について
- 原子力規制庁は、上記説明内容を確認し、以下のとおりコメントを行った。
 - ALPS 除去対象核種 62 核種の選定について、各選定手順の考え方や評価方法及び当該選定によって除去対象から除外された核種について、以下の C-14 に関連する指摘を踏まえて改めて説明すること。
 - ◇ C-14 については、当初除去対象から除外されていた核種であったが、ALPS 等処理済水に含まれる主要 7 核種の濃度と全 β 値の濃度に乖離が見られたことから、乖離の主要因核種として除去対象核種に追加された経緯がある。C-14 が対象外となっていた経緯を踏まえ、C-14 以外にもそのような核種がないかどうか確認すること
 - サンプルタンクからの ALPS 等処理済水のサンプリングについて、これまでにタンク内での濃度分布や連結されているタンク間での濃度の相違が確認されていることから、分析試料の採取における均一性・代表性について検討すること。また、分析結果の不確かさについても考慮すること。
 - α 核種の分析には、Pu、Am 及び Cm の核種別測定が要求されると思われる。表面電離型質量分析法（TIMS）や誘導結合プラズマ質量分析法（ICP-MS）等の測定手法が進歩していることから、それらの導入の可否を検討すること。
 - ALPS 除去対象核種のうち、半減期の短い核種については、時間経過による減衰等を考慮した検出下限値の設定の考え方を整理すること。
 - ALPS 等処理済水の分析結果の評価にあたり、そのトレーサビリティを確認することが重要であると考えているため、当該分析に係るマニュアル及び

標準試料等の詳細について確認したい。

6. その他

資料：

- 多核種除去設備等処理水の二次処理性能確認試験の分析等について